

綿津見神社の調査結果  
報告書

安曇誕生の系譜を探る会

ゆかりの地部会

平成27年2月

綿津見神社の調査結果

1 調査の目的

安曇氏族ゆかりの地を探すことを目的として、全国の綿津見神社（綿津見命を祀る神社）について神社の由来等を調べ、安曇氏族との関連の有無を調査する。

2 調査対象神社

調査対象とした神社は、志賀海神社所蔵のリスト（穂高神社経由で受領した）である。それら以外に調査中に新たに見つけた場合には、その都度追加した。

また海外（樺太、ハワイ等）にも綿津見神社があるが、それらは除外した。

調査した綿津見神社の県別数

県名	神社数	追加分 左記に含	県名	神社数	追加分 左記に含
北海道	6		滋賀	11	
青森	3		三重	14	
秋田	8		京都	10	1
山形	2		大阪	10	3
岩手	7		兵庫	14	
宮城	5		奈良	2	
福島	20	1	和歌山	4	
群馬	2		鳥取	21	
栃木	2		島根	33	
埼玉	3		岡山	39	2
茨城	5		広島	32	
千葉	8	1	山口	26	
東京	3		徳島	25	
神奈川	6		香川	10	
山梨	1		愛媛	44	2
静岡	56	2	高知	46	6
岐阜	2		福岡	130	1
長野	9	3	佐賀	61	
新潟	10		長崎	36	
富山	2		熊本	53	1
石川	3		大分	33	
福井	5		宮崎	13	
愛知	13	2	鹿児島	4	
			沖縄	0	
小計	181	9	小計	671	16

合計 852社

### 3 調査方法

現地訪問することを原則としたが、遠隔地の神社、宮司が常駐していない神社が多いので、神社年鑑およびインターネット情報（神社庁データ、訪問記投稿記事）により調べた。安曇氏族との関連がありそうな神社であるが情報不足の神社については現地訪問あるいは電話、手紙により問い合わせた。

### 4 調査結果の県別まとめ（神社ごとの調査結果詳細は別紙）

#### 1) 北海道の神社（リスト記載の神社数 6社）

いずれも江戸時代以降の創建である。江戸時代以降に入植した人たちが、漁業繁栄や海上安全を祈願し、海の神を祀ったのが始まりである。記紀の記述や山幸彦説話等により綿津見命（海神、龍王）は海の神としてまた天皇との関係が強いことから、漁業繁栄および海上安全の神として尊崇され祭祀されていたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 2) 青森県の神社（神社数 3社）

漁業繁栄や海上安全を祈願し、既存の神社に綿津見命を後世に合祀したと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 3) 秋田県の神社（神社数 8社）

神社創建は中世以降であり、綿津見命はその後に合祀されている。

漁業繁栄や海上安全を祈願したものと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 4) 山形県の神社（神社数 2社）

詳細は不明であるが、青森、秋田と同様と思われる。

住吉神社（高島町）には海津見大神と筒男大神が合祀されている。多分、氏神としてではなくて海の神として祀られたものと思われる。また温海町はゆかりの地との説があるが、関連は見えない。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 5) 岩手県の神社（神社数 7社）

いずれの神社も創建は平安時代以降であり、綿津見神はその後に合祀されたものと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

鵜鳥（うのとり）神社の由来：平安の初め803年卯子酉山薬師寺として建立されたのが始まりとも、また807年卯子酉大明神として開眼されたのが起源とも言われている。建久元年の義経伝説にまつわる鵜鳥神社御縁記には、鎌倉南北朝時代には鵜鳥神社は何らかの形で存在したと推定されるとのこと。祭神は鵜草葺不合尊、玉依姫、海神ノ命（ワツミノミコト）（神社庁データ）が合祀されている。「うねどり様」の呼び名で知られ、大漁と安全祈願、縁結び、安産の神様として古くから信仰されている。

陸塩神社の由来：1395年、津谷川城主林崎東九郎敬神の念篤かりしが、摂津の国播磨国海神の社を平素崇敬し、遂に村内の鎮護の神としてその神霊を勧請し、古来六社山大権現と称し、御祭神底津綿津見命・中津綿津見命・上津綿津見命・底筒男命・中筒男命・上筒男命、六柱の神を奉祀、当時の開発に努められ、御稜威著しく効を奏し、航海者・漁業者は更なり。近郷の崇敬最も厚き神社なり（以上神社庁データ）。当時、海の神として綿津見命および筒男命の6神が考えられていたようである。

#### 6) 福島県の神社（神社数 20社：飯館村の綿津見神社を追加）

神社の大半は年鑑・神社庁データでは由来等詳細は不明である。判明した神社から推測すると、中世以降に漁業・航海・水の神として合祀されたのではないかと推測される。

福島県の海沿いの地域、相馬市・南相馬市・双葉郡には綿津見神社が多数ある。これらの神社の由来は不明であるが、飯館村の綿津見神社については、多田宮司に電話で聞いた。それによると茗野（くさの）神社から平安時代に勧請し、その後綿津見命を合祀し、同時に名称も変更したとのことである（詳細後述）。他の綿津見神社も同様ではないかと推測される。

安曇氏族との関連は見いだせない。

茗野神社（福島県双葉郡浪江町請戸東迎 38）

式内社（延喜式神名帳記載神社：927年編纂）

祭神：闇淤加美（くらおかみ）神、五十猛神、大屋津姫命、抓津姫命　ただし本来の祭神は不明  
創建：養老元年（717年）に荒氏が請戸小島に社を建てて奉齋したのに始まり、その後島が海没したため、これを現在地に遷座した（この島は現在海中に暗礁として残っている）。

縁起に関する伝承に、海から流れ着いた女神を祀ったという内容の話が幾つかある。近世においては貴布根大明神と呼ばれていた。

綿津見神社 相馬郡飯館村草野（多田宮司の話）

当初は茗野神社と称していた。

創立は大同2年（807年）に浪江町の茗野神社から勧請したとされている。

このころ東北地方では広範囲にわたり宗教改革のような現象が起きていた。その後1620年に綿津見神社と改称し、その時から綿津見命を合祀している。地域には綿津見神社が多数あるが、それらとの関連はない。「はまおこし」という祭礼行事が以前は行われていた。（神輿を担いで海へ入り、榊でお祓いをする）

#### 7) 宮城県の神社（神社数 5社）

青巢稲荷神社は大同2年（807年）創建で、当初は観世音を祀っていたとのことである。その後、近世になって綿津見命を合祀したと思える。また荒嶋神社は創建時代不明であるが、当初は弁天を祀っていた。その後昭和36年に、社殿改築と名称変更し、その際綿津見命を合祀した。他の神社は中世以降の創建である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

なお日高見神社（石巻市）で大綿津見神が祀られているとの情報があるが、インターネット情報では祭神は天照大神であり、綿津見神との関連は見えない。

#### 8) 群馬県の神社（神社数 2社）

年鑑・インターネットで検索できず、また手紙での問い合わせにも返信なし。詳細は不明である。

安曇氏族との関連はなさそうである。

#### 9) 栃木県の神社（神社数 2社）

八龍神社の創建は平安時代のものであるが、その他詳細は不明である。渡神社は不明。

安曇氏族との関連は見いだせない。

安住神社（栃木県塩谷郡高根沢町）は「あずみ」ではなく「やすずみ」と読む。安曇氏とは関係ない。由来は、新井吉明が899年に国家鎮護のために摂津住吉神社の大神を分霊し勧請したことに始まる。祭神は筒男命3神と神功皇后である。名前と実体にずれがある例である。

#### 10) 茨城県の神社（神社数 5社）

茨城県には「八龍神社」「龍神社」が9社あるとのことであるが、祭神は高竈神（たかおかみ）闇竈神（くらおかみ）である。綿津見神は後世に合祀されたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 11) 埼玉県の神社（神社数 3社）

詳細は不明であるが、中世以降に合祀されたと思われる。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 12) 千葉県の神社（神社数 8社：渡海神社を追加した）

渡海（とかい）神社（銚子市）の祭神は綿津見大神であり、706年創建とされるが詳細は不明。宮司の話では、当時九州の方から長崎地区へやってきた人々がおおり、その人たちが創建した。そこは海草の良く取れるところであるが、「和布刈り」神事などはしていない。イゴ・エゴのことは聞いたことない。また安曇族との関連については全く知らないとのこと。

瀧蔵神社では明治に合祀されたようである。他の神社の詳細は不明である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 13) 東京都の神社（神社数 3社）

詳細は不明であるが、江戸時代以降の創建であり、その後に綿津見命が合祀されたと思われる。安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 1 4) 神奈川県の神社 (神社数 5 社)

5 社のうち 4 社は、創建が江戸時代以降で、綿津見命はその後に合祀されたものであり、安曇氏族との関連は見いだせない。

残りの 1 社は子之神社(湯河原町)の境内社に龍神社である。ここは式内社ではないが創建は西暦 700 年と言われ、古くからある神社である。子之神社の祭神は大己貴命、素戔鳴尊、他であるが、龍神社の祭神は海住神(わたずみのかみ、綿津見神と同じ)である。神社の由来には、竜王・妃・王子が船でこの地に到来し、この地を開拓したとある。穂積宮司の話では、神社の長い変遷の歴史の中で祭神が変わっているが、本来の神は龍神社に祭られている綿津見神とのことである。竜王と言うのは豊玉彦命、またの名は綿津見命である。すると安曇氏族はこの地に進出してきて開拓したが、しかしその後安曇氏族は衰退して他の氏族(穂積氏かもしれない)にとって代わられたと言うことになる。現在ではその痕跡はほとんど残っていないが、ここは安曇族ゆかりの地といえる。

「子之神社、穂積宮司からの回答」

綿津見命は当神社の撰社・龍神社の祭神です。このやしろには、相殿として、歴代宮司、氏子信徒の祖霊も併せて祭られています。由緒の中で、表現がまずかったのですが、綿津見命、当神社の場合「海住神(わたずみのかみ)」が、氏子の祖霊と言うことではありません。ただ、当神社の始まりは、竜王、妃、王子が、当地を開拓し、その霊地が、真鶴岬の三石でありますことは、由緒に述べてあります。祭神の変遷は、いずこの神社でもありますこととして、当神社も長い歴史の中で、現在の祭神へと移り変わり、本来の祭神は、撰社に祭祀されているわけです。

安曇族にご関心がおありのようですが、安曇族の祖神である、安曇磯良は、太平記にのみその名が出てくる神であり、神功皇后の三韓征伐の折に、皇后に、塩満珠、塩干珠を献上し、戦を勝利に導いたことから、志賀海大明神として祭祀され、また鹿島神宮、春日大社も、本来の祭神は、この安曇磯良であったことが、太平記の記述から判断されるわけです。志賀海神社以外は、鹿島、春日ともに祭神は変化していますね。また安曇磯良は、古事記、日本書紀などには出ていずに、綿津見命が、磯良に当たること、また住吉大神も、同じ性格を持つ神と言われています。安曇族は、全国にその勢力を持ち、当神社の隣町であります、「熱海」も、安曇族と関連する土地です。私の推測もありますが、伊豆山神社は、この関連のやしろであり、ここから、先程の三石が見えるわけで、平安の末に、ここの権律師であった、阿多見聖範と言う人物は、この名前、また職掌からも、安曇族の末裔であり、当地における安曇族の長の家系であったと思うのです。彼の孫が、あの北条時政です。北条家の三つ鱗の紋は、その神話に大蛇伝説があり、また伊豆山から見る三石を意識したものと思うのです。古代海洋民族は、星を見ながら移動しました。その星の中で、聖なる星座が、オリオン座であり、安曇族も、これを重んじたのが、新しいところでは、北条氏の紋、古いところでは、住吉三神、また春日大社の神奈日山である、「三笠山」につながると思います。

#### 1 5) 山梨県の神社 (神社数 1 社)

神部神社は式内社であり、860 年創建とのことである。祭神は伊弉諾尊が黄泉の国から戻って禊祓をした時化生した「祓戸ノ九神」である。記紀の神話に基づいて祭祀したものと思える。延喜式には関係氏族は秦氏とある。また富士吉田市小見明・大明見はゆかりの地との説があるが、関連は見えない。また南アルプス市に穂見神社がある。式内社であり、祭神は保食神である。神社の名称から穂高見命との関連がありそうであるが、全く関連は見えない。山梨県では安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 1 6) 長野県の神社 (神社数 9 社 : 川会神社、氷鉋斗売神社、正八幡宮神社を追加)

長野県には和名類聚抄(938 年編纂)に記載される安曇郡があり、「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊」と記載された麻布が正倉院御物の中にある。これは奈良時代の調布であり、安曇氏族が当時居住していたことの証拠といえる。安曇郡は安曇氏族ゆかりの地と言えらる。

なお、黛弘道氏は「信州には到るところ海洋民定着の跡を検出できる」(『日本の古代 8 海人の伝統』「海人族のウヂを探り東漸を追う」黛弘道)と述べている。しかし信州に海人族が多数進出してきて定着したことは理解できるが、彼らのすべてが安曇氏族であったかどうかは不明である。今回の神社調査により安曇氏と関係あると考えられる神社は次のようである。

**穂高神社**(安曇郡、現在の安曇野市)は式内社であり、創立年代は不明であるが、平安時代ないし奈良時代と思われる。祭神は穂高見命、綿津見神、他であり、地元では古来より安曇氏族が祀る神社とさ

れている。

**川会神社**（安曇郡、現在の安曇野市）は式内社であり、673年造営といわれる。地元では古来より安曇氏族が祀る神社とされ、当初は前科郷（現在の池田町地域）にあったとのこと。

**正八幡宮神社**（安曇郡、現在の安曇野市明科七貴）神社の伝承に、川会神社が慶長時代の大洪水で社地共に流失し、わずかに残った丸い上石と共に八幡宮へ合殿されたとのことである。そして大綿津見命が合祀されているとのことである。

**氷鉤斗賣神社**（更級郡、現在の長野市）は式内社であるが、創建年代は不詳である。主祭神は宇都志日金拆命であり、氏子の伝承に「安曇氏が下ってきた」とある。安曇氏族との関連が深いと考えられるが、他に安曇氏族の痕跡はなく、あいまいである。

玉依比売命神社（埴科郡、現在長野市）は式内社である。主祭神は玉依姫命であり、綿津見命は祀られていない。玉依姫命を祀る神社は全国に多数ある。それは神武天皇の母としての玉依姫命を祭祀しているように見え、安曇氏族との関連は見えない。

長野県の他の神社では綿津見命は後世に合祀されたようである。海と関わりのない長野県の場合、地域住民（氏子）と漁業・航海との関連はない。合祀の事情は水の神として雨乞い祈願、移住してきた住民がかつての居住地で祀っていた神を勧請した等が考えられる。

新海神社（佐久市）は新開（にいさく）神社→新開（しんかい）神社→新海（しんかい）神社と変わってきたと言われ、新開（にいさく）のサクは、宇都志日金拆命のサクからきているとして、佐久における安曇族の痕跡であるという説がある。しかし、新海神社の祭神は綿津見命と全く関係ない神であり、安曇氏族との関連は見えない。また松本市安曇村は明治以降に改名したもので、全く関係ない。

#### 17) 新潟県の神社（神社数 10社）

いずれの神社も創建年代は平安時代末以降かあるいは不明である。そして綿津見神は神社創立以降に合祀されたように思える。佐渡島の八幡若宮社の境内社渡海神社の場合も後世に航海の安全を祈願して境内社として祭祀したと思われる。また関川村安角はゆかりの地との説があるが、関連は見えない。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 18) 富山県の神社（神社数 2社）

創立年代不明であり、詳細も不明である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 19) 静岡県の神社（神社数 56社：ただし浜松市堀谷の六所神社と焼津市の船玉浦神社を追加）

静岡県には非常に多数の綿津見命を祀る神社があり、その中に式内社が6社ある。しかし神社の名称は綿津見神社でなく、伊東市に海津美神社が在るのみである。また綿津見命は祭神として合祀されたものである。それらの神社ではいずれも安曇氏族との関連を見出すことはできない。綿津見命を祀る式内社の場合、当初は別の神を祀っていたが後世において名称変更して綿津見命を祀る神社に変遷している。この点では安曇氏族との関わりがありそうにも見えるが、名称変遷の時代は中世以降と推測され、また筒男命も同時に祭祀している。中世以降に海の神として祭祀したと思え、安曇氏族との関わりは不明である。別紙「静岡県の綿津見神社の調査結果まとめ」参照のこと。

##### 六所神社

浜松市地域を中心として六所神社が75社以上ある。そしてそれらの神社の相互の関連はないとのことである。浜松市宮口および堀口の六所神社の宮司の話では、現在は綿津見神と筒男神を祀っているとのことである。これは延喜式記載の神と異なっており、祭神の変遷があったと思われる。他の神社も同様と思われるが、未調査である。この祭神の変遷の事情は不明というか不思議なことである。現在の祭神は綿津見命三神と筒男命三神である。これらの神が同居しているということは、記紀神話が定着した後世において、氏神としてではなくて漁業および航海の守護神として祭祀されたと考えられる。

浜松地域は愛知県渥美・豊橋の続きであり安曇氏族が定住していた地と考えられるが、綿津見神社との関連においては安曇氏族との関連ははっきりしない。今後の調査課題である。

**船玉浦神社**は住吉神と合祀されており、宗像神社と共に焼津港の守護神として祀られている。この神社は漁業と航海安全の神である。綿津見神が住吉神、宗像神と並んで海の神として敬われていたことを示している。

#### 20) 愛知県の神社（神社数 13社、ただし名古屋市の綿神社と蒲郡市の赤日子神社を追加した）

濃尾平野は安曇氏族のゆかり地であることは確かであるが、意外と綿津見神社は少ない。名古屋市北

区元志賀地域には弥生時代の朝日遺跡がある。ここは弥生時代前期から中期にかけての大規模な集落跡であり、弥生時代前期に先住の縄文文化地域と対峙していた時代の最前線集落であった。そしてここには綿神社（式内社）がある。綿神社の現在の祭神は玉依比売命、応神天皇であるが、古くから志賀海神社と同様に安曇氏が奉斎する神社と言われている。延喜式でも関係氏族として安曇氏と記載されており、『大日本神祇志』その他の古文書に祭神として綿津見神が記載されている。また蒲郡市には赤日子神社（式内社）があり、現在の祭神は彦火火出見尊、豊玉彦命、豊玉姫命であるが、渥美郡誌によると安曇氏が祭祀する神社であるとのことである。さらに岡崎市には綿積神社がある。これは式内社ではないが古くからの神社であり、綿積命が祀られており安曇氏との関連を思わせる。これらは、この地域が安曇氏族と関わりの深いことを示している。

和名類聚抄によると渥美半島付近は渥美郡渥美郷があった地域であり、安曇氏族ゆかりの地と考えられるが、ここには綿津見神社は見当たらない。なお神島に八代神社がある。明治に地域の神社を合祀したとのことである。主祭神が綿津見神であることは、神島地域では綿津見神社の影響が強く残っており、安曇氏族のゆかりの地と思われる。（三重県の節参照）

この地域においては、安曇氏族との関わりは明白であるが、綿神社・赤日子神社では祭神が綿津見命ではないこと、また綿津見神社が少ないこと、安曇でなく「渥美」と表記されること等は興味深い謎である。

## 2 1) 岐阜県の神社（神社数 2社）

神明神社は多数あるが、その中で御望の神明神社は綿津見命を合祀している。ここには古くより海神社（よみは不明）があったとのことである。その海神社と安曇氏族との関連があるかもしれないが、今のところ不明である。

岐阜市はかつて厚見郡厚見郷があった地であり、安曇氏族ゆかりの地と言える。しかし詳細については不明であり、今後継続調査が必要である。なお「厚見寺跡」が岐阜市寺町にある。岐阜市教育委員会によると、寺の創建年代は7世紀末、創建者は不明とのことである。厚見郷は岐阜市南部地域と推測されているが、厚見寺との関連については不明とのことである。

## 2 2) 石川県の神社（神社数 3社）

神社名称は綿津見神とは無関係であり、後世に合祀されたと思われる。その事情については不明である。

安曇氏族との関連は見いだせない。

奈豆美比咩（なずみひめ）神社（石川県羽咋郡志賀町安津見）は式内社であり、701年創建とされる。主祭神は豊玉比咩命であり、三人の姫を連れ、桃の木船にご乗船、能登国桃ヶ浦へ入港し、各地に立寄り、遂に安津見の「おたび」へ到着した。窟居し良民を苦しめる土賊を平定、三姫をこの地に留め、人々に建築法を教授、田畑の開墾を奨励したと伝承されている。陵と伝えられる円墳もあるとのこと。奈良・平安時代には繁栄したが、戦国乱世に頻発する兵火により灰塵に帰したが、その後江戸時代最も隆盛を極めたとのことである。

志賀町、安津見という地名と桃の木舟に乗って移住してきたという神社の伝承話を考慮すると、安曇氏族との関連があるようにも見える。舞鶴市・丹後地域では安曇氏は駆逐された形跡があり、その争いの際この地に逃げてきたと推測することもできる。今後の調査研究が期待される。

## 2 3) 福井県の神社（神社数 5社）

神社由緒の詳細は不明であるが、神社名称は綿津見神と無関係であり、綿津見命は後世に合祀されたと思われる。安曇氏族との関連は見いだせない。

## 2 4) 滋賀県の神社（神社数 11社）

琵琶湖の湖北地域にはかつて伊香郡安曇郷（古くにはイカコグンと読んだ）があった。この地域の神社は戦国時代の抗争の中で焼失して絶えてしまったとのことである。綿津見命を祀る神社が伊香郡（現長浜市）に2社あるが、ここでは安曇氏族との関連は見えない。

また湖西の安曇川町は町史によれば、安曇氏族が弥生時代に開拓した地域とのことであり、「安曇」、「安曇川」、「安曇橋」（いずれもあどと読む）という地名が残っている。この地は伊香郡安曇郷の隣であり、古くには高島郡と称していた。このようなことからこの地は安曇族ゆかりの地と言える。

しかし安曇川町地域では綿津見神社は残っていない。そして安曇氏族は継体天皇以前の時代に三尾氏に征服されて、安曇氏族は他の地域へ強制移住させられてしまったとのことである。それでも「安曇」

と言う地名が残っており、安曇氏族との深い関連が残っている。また安曇比羅夫の墓と言われる石碑がある。いつの時代に誰が設立したのか不明であるが、この地域の人々は安曇氏族との因縁を識っていたことと思う。

安曇川町地域では「安曇」を「あづみ」ではなくて「あど」と読んでいる。そして万葉集には安曇川のことを読んだ歌が幾つもあるが、それには「安曇」という漢字は使われておらず、「阿渡」、「足速」、「足利」、「吾跡」という漢字表記がなされている。これらは興味深い大きな謎であり、そしてこの地域における安曇氏族の興亡と悲劇を象徴しているように思える。

なお阿志都禰神社（安曇川町川島）の祭神は島津彦命であり、安曇氏族とは関係ないと言える。

## 2 5) 奈良県の神社（神社数 2社）

奈良県では綿津見神社は少なく、安曇氏族との関連を見いだせない。

なお大和国添上郡安曇田荘があったとのことである（「安曇氏の研究」松原弘宣）。また阿曇連比羅夫は**安曇山背連比羅夫**と称することもあり、山背地域に居住していたとも推測できる。しかし安曇氏族の痕跡ははっきりしない。

## 2 6) 京都府の神社（神社数 10社、ただし宇豆貴神社を追加した。他に関連神社として老人嶋神社、笑原神社、大川神社がある）

京都府の丹後地方には和名類聚抄によると凡海（おおしあま）郷があった。そこは凡海連の居住地だったと考えられる。また神社祭神にもさまざまな安曇氏族の痕跡がみられる。この地域は安曇氏族ゆかりの地と言える。

**籠神社**（宮津市）の主祭神は彦火明命であり、相殿に海神（わたつみのかみ）が合祀されている。宮司は代々海部（あまべ）氏である。海部氏の系図が残っており、古来より海部氏の係累であった。しかし相殿に海神を祀っている事情ははっきりしないとのことである。古代史の中では、海部が創設されたときその統率者として大浜宿禰（安曇氏の祖）が任命されている。つまり海部氏は統率者である安曇氏に敬意を表して、その祖神とされる海神（わたつみかみ）を祀ったのではないかと思う。ただし、住吉神を祭祀しているという説もあり、その説に基づくと海神は筒男命と考えられる。海神を祭祀した事情ははっきりしない。

宮司の話では、過去においてたびたび朝廷から出兵要請があったり、地域での勢力争いに巻き込まれたりして、神社としては苦しい時代が続いたとのことである。また海人の幸が阿曇連だったことについては、日本書紀の編者たちがいい加減なことを書いており大変に迷惑していると苦い顔をしていた。

**大虫神社**は与謝郡与謝野町温江にあり、明治14年に阿知江神社を合祀した。大虫神社は、往古は大江山の池ヶ成に鎮座していたが中世に今の地に遷ったとされる。本来はこの地は阿知江神社の地であったが、遷ってきた大虫神社の名称のみが残ったという可能性もある。阿知江神社の祭神は少童命であり、いまも大虫神社に合祀されている。祭神が少童命とされる事情は不明であるが、度会延経は『神名帳考証』において「あつえ・あちえ」と「安曇（あづみ）」との関係を仄めかしているとのこと（ネット情報：大虫神社）。そうすると、古代において安曇氏が神社を祭祀していたが、その後勢力争いに敗れて名前が変わり阿知江神社となったのではないかとの推測もできる。

**矢田神社**の現在の主祭神は建田背命であり、配神として和田津見命がいる。海部直は建田背命を祖神としており、建田背命及其御子武諸隅命、和田津見命を祀ったと言われている。鎮座地は「久美浜町海士」であり、海人と関わりの強い地域であることがわかる。また『古代海部氏の系図』（p103）によると祭神は元「綿積神」だったとのことである。安曇氏の存在を推測することができる。

**老人島（おいとしま）神社**は冠島にあり、現在は天火明命・日子郎女命とのこと。しかし祭祀を行っているのは地元の凡海郷の人々である。すとかつては凡海連の祖神綿津見命を祀っていたが、安曇氏族の衰退に伴い海部氏が祭祀するようになり、祭神を入れ替えたのではないだろうかと思える。

**笑原（のほら）神社**はかつて凡海郷のあった野島、小橋、三浜村の総氏神として祭祀されていたが、その後舞鶴市紺屋町に遷座したと思われるらしい。いまは**笑原（やはら）神社**と呼ばれ、祭神は天照大神 豊受大神 月夜見神である。しかし元来は冠島凡海息津嶋の神、綿津見命だったと推測できる。（参照：『日本海と出雲世界』「現代に生きる冠島の古代信仰」高橋卓郎）延喜式には関連氏族として海部・凡海連と記されている。

**宇豆貴（うづき）神社**は式内社であり、主祭神は伊邪那岐命と宇都志日金拆命である。安曇氏の氏神的存在だったと推測できる。

**大川神社**は由良川の下流部にあり、冠島より遷し祀ったとの伝承がある。加佐郡では最高の神階をもち、宮津の籠神社とともに正一位と記されている。（参照：同上）



以上の神社は、かつてこの地域が凡海連氏の居住地であったことを強く示唆している。安曇氏族はいつの頃か滅亡してし、その後海部氏（海部直）がこの地域を支配するようになったと推測できる。

### 27) 和歌山県の神社（神社数 4社）

紀国には多くの海人たちが居住しており、また有力な水軍が本拠地としていた地である。当然のこととして海の神を祀る神社が多数あったと思われる。しかし綿津見命を祀る神社は4社のみで、それも合祀しているに過ぎず、安曇氏族の影は薄い。安曇氏族との関連は見えない。

### 28) 三重県の神社（神社数 14社）

八代神社は伊良湖水道の中の神島にあり、主祭神は綿津見命である。ここは渥美半島との関わりも深く、安曇氏（渥美氏）との関連を推測させる。弥生人たちは東方進出にあたり、伊勢から伊勢湾を越えて伊良湖岬へ渡ったと考えられている。神島はその通り道である。そして渥美半島にある古墳の石室に使われた石が神島産出であり、海人たちとの関わりが強いと言われている。

鈴鹿市の小川神社には綿津見命が合祀されている。ここでは綿津見命は住吉さまとも呼ばれている。そして境内の案内板では上津綿津見神（住吉さま）：海の守護神、中津綿津見神（住吉さま）：航海・漁業の神、底津綿津見神（住吉さま）：商売繁盛・こ授け・縁結びと説明されている。綿津見命と筒男命とが混合しており、安曇氏族の祖神としての特性は消えてしまっている。

三重県では神島以外では安曇氏族との関連は見えない。

また、鳥羽市には海土潜女神社があり、祭神は潜女神（くぐりめのかみ）である。この神は「海女のお弁」とのことである。海女たちが祭祀したと思われるが、綿津見神でなく海女のお弁を祀っている点は興味深い。海人であるけれども安曇氏族との関わりがないことを示していると思える。

### 29) 大阪府の神社（神社数 10社 ただし住吉大社境内社大海神社（祭神豊玉彦命）、岸和田市の夜擬神社（祭神布留多摩命）、吹田市垂水神社（末社に大綿津見命が祀られているらしい）の3社を追加した）

摂津国には住吉大社（大阪市）の境内社志賀神社があり、少童神三神が祭祀されている。少童神は官司の津守氏の氏神とのことである。また境内社大海（だいかい）神社は式内社であり、祭神は『神名帳考証』によると大綿津見命が祀られていたとあり、これも津守氏の氏神とのことである。津守氏は明治以前は代々官司として仕えていたとのことであるが、津守氏と安曇氏との関係はどうなのか、よく分からない。住吉神と綿津見神が同居している神社も多くあり、これらの事情もよく分からない。

履中天皇即位のとき、阿曇連浜子が住吉仲皇子の反乱に加担したことが日本書紀に記載されている。この時代安曇氏族は摂津国で活躍していたと考えられる。そして難波地域は「安曇江」（続日本紀、聖武天皇紀）や「阿曇寺」（日本書紀孝徳天皇紀）が存在していた。安曇氏族のゆかりの地であることは確かである。しかしこの地には綿津見神社が残っていない。隣接する播磨国には安曇氏の氏神と思われる海（わたつみ）神社があることから、播磨国の方が本拠地だったと思われる。（兵庫県の項参照）

現在大阪府中央区船場の安堂寺町地域は「渥美連合」と称している。かつて阿曇寺があった場所とのことで、阿曇寺が変遷して安堂寺になったと言われている。ここは難波宮跡の隣であり、かつて安曇氏族が活躍していた地域と推測される。しかし阿曇寺や安曇江の位置は諸説あり確定していない。摂津国については今後詳しく調査すべき地域である。

河内国には安曇氏族の八木造がいたことが分かっている。八木造は新撰姓氏録によると「和多罪豊玉彦命の兄の布留多摩乃命の後」とあり、安曇氏の一族とされている。八木氏は河内国和泉郡八木郷（現在の岸和田市八木地区）を本拠地としていたとのことである。この地域に式内社である夜疑（やぎ）神社があり、主祭神は布留多摩命である。布留多摩命は綿津見命の次男であり、八木氏は安曇氏の一族と考えて良いと思われる。しかし八木氏と安曇氏の関係は詳細不明である。また淡路島の八木村が八木氏の故地であるという説もあるが、これについては兵庫県の項に記述する。

### 30) 兵庫県の神社（神社数 14社）

播磨国では神戸市垂水区に式内社海（わたつみ）神社があり、祭神は綿津見三神である。ここは、『古代氏族系譜集成』によると海神綿積豊玉彦命の本拠地である。海神社の由緒書きでは豊玉姫命・彦火々出見命と関連させて、航海安全、漁業繁栄の神として祀られていると記述している。さらに古代においてこの地は「海事に従事していた人々を治め、この地域に勢力をもっていた豪族」が海大神を祭祀し神社を創建したと考えられるとある。また神社の西方約550mの所には兵庫県下最大の前方後円墳である五色塚古墳があり、成立は二世紀末から五世紀初めとされ、瀬戸内海の海上航路の重要地である明石海峡大

橋を望む高台にある。この墳丘を覆っていた葺石は、明石海峡を挟んで対岸の淡路島から運んできたこと記述している。この地は明石海峡に面しており、摂津と九州を結ぶ海上航路の要衝地であり、航路確保のための重要な場所である。これらのことから、古代にこの地で活躍していたのは、海人の幸として海上交通を支配していた安曇氏族と考えることは合理的と言える。そして海神社は摂津国・播磨国地域に進出した安曇氏族の氏神社だったと思われる。播磨国の摂津国よりの地域は安曇氏族の重要な活動拠点であったと考えられる。

この地はゆかりの地である。しかし海神社の由緒書では、神功皇后、豊玉姫命、彦火々出見命等の天皇家との関連を強調し、安曇氏族については「海事に従事していた人々を治め、この地域に勢力をもっていた豪族」という表現を使い過小評価している。安曇氏の名前を抹殺しようとする動きが過去にあったかもしれない。それは、安曇川町の「安曇 あど」や東海地方の「渥美」の場合を想起させる。

淡路島は明石海峡の対岸にあり、前述のように海上交通にとって重要な地である。多くの海人たちが活動しており、古代では安曇氏族との強い関係があった。しかしいまでは安曇氏族の痕跡は見えない。日本書紀によると、応神天皇のとき海人がさばめいて反乱したのを大浜宿禰（安曇氏の祖）が鎮めて従属させた。その功により海人の幸に任命された（272年、ただしこれは機械的に年代換算したもので、朝鮮の三国史記と比較すると380年となる）。この海人は淡路島の海人と思われる。その後、阿曇連浜子が淡路島の「野嶋の海人」を動員して、住吉仲皇子の反乱に参加したと日本書紀にある。これらのことから淡路島は安曇氏族との関連が強かったと考えられる。しかし反乱に失敗したあと、野嶋の海人は「倭の蔭代（こもしろ）屯倉」（場所は不明とのこと）に移住されたと記述されている。つまり、安曇氏族に従属する野嶋の海人たちは他所へ移住させられ、淡路島にはいなくなつたと考えられる。また日本書紀の記述では「野嶋の海人」を動員したと言う表現であり、「安曇部」と言う表現ではない。この時代（400年頃）安曇部はまだ組織されていなかったようである。また淡路島では天皇と関わりのある「御原の海人」たちの居住地であった。その後においても多くの海人たちが活動していたと考えられるが、安曇氏族や安曇部の痕跡はない。そして淡路島には綿津見神社は残っていない。

なお、淡路島には淡路国三原郡八木村に式内社笑原（やはら）神社がある。『古代氏族集成』によると、八木造の祖は八玉彦命（振魂命の孫にあたる）であり、ここが居住地とある。つまり八木造の発祥の地との説である。しかし笑原神社の祭神は素盞鳴命、月読命、少彦名命であり、綿津見命と無関係である。

神戸市垂水神社の祭神は豊城入彦命であり、綿津見命とは関係ない。神社の由緒によると、この地方に勢力を持っていた阿利真公が大化の改新（646年）頃におこった早魃の折、垂水岡（千里丘）から湧き出す水を、当時の難波長柄豊崎宮に送り、その功を讃えられて、垂水公の姓（カバネ）を賜るとともに垂水神社を創祀したとのことである。すると垂水神社は安曇氏族と関係ないと言える。ただし垂水神社の末社に大綿津見命が祀られているとのことであるがはっきりしない。

明石市の**林神社**は式内社であり、主祭神として少童海神を祀っている。社伝によるとこの地の海岸に大きな赤石があり、そこに少童海神が現れたとのことであり、その故にこの地域を明石と呼ぶようになったとのことである。少童海神は綿津見神のことであり、安曇氏族との関連が考えられる。

揖保郡太子町地域は古くは播磨国石海里といわれた地域である。播磨国風土記によると大化改新の頃に阿曇連百足と太牟が大規模な灌漑工事を行い水田開拓を行った地域である。阿曇連は元は摂津の浦上里に住んでいたが、播磨国揖保郡の浦上里に移り住んだとのことである。この地域は安曇族ゆかり地である。しかし現在は綿津見神社もなく、その他の痕跡も残っていない。

なお、一宮町安積（あづみ）はゆかり地との説があるが、郷土史家によると全く関係ないとのことである。

### 3 1) 鳥取県の神社（神社数 21社）

和名類聚抄によると米子市付近には**伯耆国合見郡安曇郷**があった。現在は上安曇と下安曇の二つの村がある。これらは「あづま」と呼ぶがこれは住民が「あづみ」を訛ったことによるらしい。これらのことからこの地域は安曇族ゆかりの地といえる。

しかし鳥取県では「綿津見神社」と称する神社はなく、綿津見命を祀る神社からは安曇氏族の関連や痕跡を見出すことはできない。安曇氏族は長い歴史の中で衰退してしまったと思える。

### 3 2) 島根県の神社（神社数 33社）

隠岐の島には海士町があり、また天平五年の正税帳には郡司として阿曇三雄の名があり（『穂高神社史』）、平城京出土木簡には安曇部の名前が記載された木簡が多数見出される（『古代豪族の謎』「安曇氏の研究」松原弘宣）。隠岐郡西ノ島町に**海（うみ）神社**がある。式内社であり、当初は海神2座を祀って

いたとのことである。この2座とはどの神のことかあいまいであるが、綿津見神と住吉神のことと思われるとのことである。綿津見神社リストでは2社として記載されているが、所在地は同じであり、なぜ2社なのかは不明である。

これらのことから隠岐島が安曇氏族ゆかりの地であることは確かである。

一方、隠岐島海士町では733年当時漁業のほか農業もおこなわれていた。さらに、隠岐では「カナギ」という独特な漁法が行われている。この漁法は、アワビやサザエなどの貝類を裸で海に潜って採るのではなく、男が小さな舟に乗り、舟の上から海底をのぞき見て、アワビをアワビカギと呼ぶ漁具ではがしたり、サザエをヤス（サザエヤスとも）ではさみとるもので、女は魚介類の加工にあたるのであるとのことである。（『日本海と出雲世界』「古代の出雲・隠岐」、和田萃）

古代において北九州の海人（志賀島の海人他）は潜水漁法を行っていたのであるが、隠岐の海人は「カナギ」という舟上漁を行っていたようである。それがいつの時代から始まったのか不明であるが、隠岐島の海人が志賀島の海人と同一氏族系であるとは思えない。つまり綿津見系の海人とは断定しがたい。

島根県（石見国）では綿津見神社からは安曇氏族との関連は見えない。なお、播磨国風土記に阿曇連が「石海の人夫」を連れてきて石海里を開墾したとの記載がある。この石海は石見のことで、石見国の工人と考えられている。すると石見国には安曇氏族の支配地があったと思われるが、しかし現在その痕跡はなにもない。

### 3 3) 岡山県の神社（神社数 39社 ただし笠岡市の海（わたつみ）神社と高梁市の海（わたつみ）神社（祭神豊玉姫神）を追加した）

岡山県では創建、由緒、祭神等の詳細不明な神社が多く、はっきりしないが、安曇氏族との関連を思わせる神社はない。ただし平城宮出土木簡に備中国浅口郡船穂郷（現在浅口市船穂町のことか？）阿曇部押男と記載されたものがあり、この地域に安曇氏族がいたと思われる（「安曇氏の研究」）。

岡山市東区檜原の八幡宮は岡山県神社庁データによると、和田八幡宮と称し、祭神は綿津見大神および応神天皇である。社伝によると、本村が昔海岸であった頃、和田津見神を祭祀し、東南の山上に鎮座していたが、清和天皇の貞観元年（859年）に八幡宮を合祀し、寛文3年（1663年）2月に現在地の和田の御崎に遷座し、和田八幡宮と称したとある。そして明治元年に八幡宮と改称し奉ったとのことである。するとここはかつて安曇氏族が活躍していたことが推測されるが、現在ではあいまいである。

高梁市高倉にある海（わたつみ）神社の祭神は豊玉姫神であり、古くから雨乞いの神として崇敬されていたとのことである。しかし海神社であるのに祭神が綿津見神でないのはなぜか不思議である。笠岡市新賀の海神社の詳細は不明である。

### 3 4) 広島県の神社（神社数 32社）

広島県の神社では安曇氏族との関係のありそうな神社は見つからない。

### 3 5) 山口県の神社（リスト記載の神社数 26社）

下関市の龍王神社は、古くからあった大綿津見神社を合祀して改称したものである。神功皇后の三韓征伐の際の伝承が残っているが、あいまいである。その他の神社では安曇氏族との関連は見えない。

なお平城宮跡出土木簡に周防国吉敷郡神崎郷（現在山口市吉敷と推測するが神崎は不明）戸主阿曇五百麻呂と記載されたものがある（「安曇氏の研究」）。周防国正税帳には「長門国豊浦團五十長凡海我孫」の名が記載されており、この地に安曇族が居住していたと推測できるとのことである（「信濃国安曇族の考古学的一考察」『信濃』昭和24年5月 大場磐雄）。また平城宮跡出土木簡に周防国大嶋郡美敢（みかも）郷凡海直薩山御調尻塩、同凡海阿耶男御調塩と記載されたものがあるとのことである（「海人のウヂを探り東漸を追う」）。このように山口県では古代に安曇氏が居住していたことは明らかであるが、いまでは痕跡は定かではなく、郷土史研究者に聞いても不明である。

### 3 6) 徳島県の神社（神社数 25社）

徳島県の神社では「綿」の代わりに「和田」、「和多」と表記する場合が多い。安曇氏族との関連を思わせる神社はない。

なお、徳島県では安曇および安曇部の名前が記載された古文書があり（「安曇氏の研究」）、かつて安曇氏が活動していたと推測される。また『徳高神社史』によると、男帝の時の神祇官は阿波国から出すこと、その一人に阿曇部を入れることの定めになっていたとのことであり、阿波国には阿曇部が多数居住していたと推測できる。そして和多郡美豊玉比賣神社（本リストでは除外している）を祭祀していたとのことである。この神社は式内社であり、祭神は豊玉姫命である。現在は雨降神社、王子和多津美

神社、王子神社に比定されている。ただし豊玉姫命は神武天皇の祖母に当たり、安曇氏系というより天皇系の神である。安曇氏族が祭祀していたとすれば、なぜ綿津見命を祀らなかったのか不可解である。

このように徳島県では古代に安曇氏族が居住していたことは確かと考えられるが、現在ではその痕跡はあいまいであり、安曇氏族との関連は見えない。

### 37) 香川県の神社 (神社数 10社)

平安時代の讃岐国大内郡入野郷戸籍(1004年作成)には安曇茂丸他多数の名前が記載されており、安曇族は古くよりこの地に居住していたであろうとのことである(『穂高神社史』)。安曇氏族ゆかりの地と思えるが、現在ではあいまいである。

### 38) 愛媛県の神社 (神社数44社 ただし西条市の龍神社(祭神大和田津美命)、宇和島市津島町の綿津見神社(祭神豊玉彦命)を追加した)

西条市の大崎龍神社は漁村地域にあり、漁業との関連は強い。それゆえ海の神を奉斎してきたと考えられる。平城宮跡出土木簡に伊予国伊予郡石井郷海部里の安曇部太隅と記載されたものがあり、安曇氏族との関わりを思わせる。しかし現在では安曇氏族との関連は不明である。

### 39) 高知県の神社 (神社数 46社、ただし6社追加した)

海津見神社が16社(高知市の大海津見神社を含む)あり、数多い。また綿津見神を合祀している神社も多い。リストに記載のない海津見神社が6社もあった。しかし安曇氏族との関連は見えない。

高岡郡佐川町の海津見神社の官司の話によると、創建は元禄のころとのこと、あまり古くない。他の神社も同様ではないかと思うとのこと。神社は地区の氏神として、また水の神として祭祀されている。近隣の海津見神社との関連はない。祭神は綿津見神であり、神社名は海津見神社であり、ちぐはぐである点について、海をわたと読むことは昔からのことで、どちらも「わたつみ」と読んでいる。当然のことと考えており、問題としていないとのこと。また安曇氏族との関連は全く聞いたことないとのことである。

### 40) 長崎県の神社 (神社数 36社)

綿津見神社(和多津美神社等含む)の数は多い。安曇氏族の氏神として祭祀しているのかあるいは、漁業・海上安全のために祭祀しているのか判明しない。そして安曇氏族との関連は見えない。

佐世保市高島町の志賀神社の祭神は海童命であるが、瀬戸越町の志賀神社の祭神は底筒男命である。また近くの西海市には志賀海神社があり、祭神は綿津見命である。神社の名称・表示および祭神がちぐはぐのように見える。これは綿津見神社が氏神神社として祭祀されていたのではないからと思える。長崎県では海と関係深い生活であり、海の神を祀っていたことは容易に推測できる。その際海の神として綿津見神、住吉神、宗像神は同等であり、混在していたのではないだろうか。

対馬市ではリスト記載の神社は8社すべて式内社である。この他に関連あると思われる神社が5社ある。ただしそれらは祭神が豊玉姫、玉依姫、磯武良、彦火火出尊等である。対馬市の綿津見命を祀る神社は神社名称・表示および祭神に関してまちまちである。狭い島の中なのに、なぜこのようにバラバラなのか不思議である。過去に相当に大きな変遷があったと思われる。

壱岐島には5社あるが、その由来ははっきりしない。和多津美神社は豊臣秀吉の時代の創建とのこと。漁業に関わる人が多く、海の神として地域に祭祀されていると思える。安曇氏族の痕跡はなにもない。

### 41) 福岡県の神社 (神社数 130社 ただしみやま市の綿積神社を追加した)

福岡市地域には、和名類聚抄によると**糟屋郡安曇郷**があった地である。また那津宮家があり、海犬養連が守衛役を務めていた(黛弘道「海人のウズを探り東漸を追う」)とのことである。明らかに安曇氏ゆかりの地といえる。

福岡県では綿津見命を祀る神社は圧倒的に多い。神社名として綿津見神社(和多津美神社、海童神社、志賀神社等含む)と称するものも非常に多い。しかし神社数は多いが神社名や祭神名はまちまちで整合性に欠けている。安曇氏族の氏神としての綿津見神社であれば、神社名および祭神名について「綿津見神社」、「綿津見命」として表示が統一されていないのはなぜなのか、不思議である。福岡県内ではそれほど離れた地域ではないから、情報は伝わっていたと思え、神社名や祭神名は統一されているべきと思う。福岡市の志賀海神社は代々阿曇氏が官司を務めてきており、安曇氏族ゆかりの神社である。しかしなぜ綿津見神社と表記しないのか不思議であるが、その理由は不明である。

糸島郡にも多くの綿津見命を祀る神社があるが、安曇氏族との関連は不明である。

大川市には風浪宮があり、ここの宮司は代々阿曇氏であり、安曇氏の末裔と思われる。

隣の柳川市には風浪神社が多数あり、大川市の風浪宮との関連を思わせるが、詳細不明である。また柳川市に海童神社(わたつみと読む)が多数ある。綿津見神社と表記しないのはなぜなのか不明である。祭神は綿津見神、海津見神、少童神とまちまちであるが、神社数が多いことから安曇氏との関連を思わせる。しかし詳細は不明である。

福岡県南部、有明海北部の筑後川流域の大川市・柳川市・みやま市には多数の綿津見命を祀る神社がある。この地域は安曇氏族との関連があったと思われるが、詳細不明であり今後の課題である。

なお、北九州市門司区の和布刈(めかり)神社の祭神として安曇磯良神が航海の神として合祀されている。安曇氏族の本来の祖先神は安曇磯良神という説もあり、安曇氏族との関わりは強いと思われる。この神社では第1座の祭神は宗像三女神であり、安曇磯良神は第5座である。この神社は神功皇后にちなんで創建されたとのことであり、そのために日本書紀の記載に準じて安曇磯良神を合祀していると思える。安曇氏族との関連は見えない。

#### 4 2) 大分県の神社(神社数 33社)

大分県の綿津見神社は詳細不明であるが、安曇氏族との関連は見えない。海沿いにあり、漁業繁栄の祈願として祀られていると思われる。

なお、大宝二年(702年)の豊前国戸籍があり、戸主等の妻として阿曇部馬身賣、阿曇部阿理賣、阿曇部法提賣の記載があるとのことである(『穂高神社史』)。これらの婦人たちは、近くに阿曇部がおり、そこから嫁入してきたと思われる。するとそこは安曇氏族の居住地といえる。しかし現在そのような痕跡は見えない。

#### 4 3) 佐賀県の神社(神社数 61社)

佐賀県には綿津見命を祀る神社が多数あるが、海上交通安全・漁業繁栄を祈願して祭祀しているものと思える。また既存の神社に綿津見命を合祀している神社が大半である。川副市の志賀神社は町誌によると志賀海神社から分霊したとあるが、祭神は筒男命である。なぜなのか、不思議である。

この地域は大川市・柳川市の隣であり、安曇氏族との関連がありそうな地域であるが、神社からは安曇氏との関連は見えない。

#### 4 4) 熊本県の神社(神社数 53社 ただし玉名市の綿津見神社を追加した)

熊本県で綿津見命を祀る神社は多い。しかし既存神社に合祀されているものが大半である。玉名市にも数多いが創建や由緒は不明である。また宇城市不知火町には永尾(えいのお)神社がある。創建は713年、祭神は海童神で海童神がエイの背に乗ってやって来たとの言い伝えがあるとのこと。これは安曇氏との関わりを思わせるが、内容はあいまいである。

熊本県では安曇氏族との関連は見いだせない。

#### 4 5) 宮崎県の神社(神社数 13社)

宮崎県の神社は少ない。海沿いに行くつかあるが、海上交通安全や漁業繁栄を祈願してのものと思える。安曇氏族との関連は見えない。

#### 4 6) 鹿児島県の神社(神社数 4社)

鹿児島県の神社は少なく、安曇氏族との関連は見えない。

#### 4 7) 沖縄県の神社 なし

### 5 考察

#### 1) 祭神名称表記について

祭神の名称・表記はバラバラである。「わたつみ」が先行し、その発音に漢字を当てたと推測される。つまり「わたつみ」神は、漢字文化の中でなく、倭文化の中で発生したと考えられる。しかし、氏族の祖神の名前の表記がまちまちで統一されていないということは、安曇氏族として統一性を欠いていたことになる。すると、安曇氏族と関係ない人々がそれぞれの知識に基づいて表記した結果と考えられる。結局のところ、綿津見神社の多くは安曇氏族と関係なく、海の神として祀られている神社が多いと推測される。

現代の書物・資料に記載されている祭神名称によると以下のようなものである。

#### 記紀での表記

古事記の表記（『日本古典文学 古事記』より）：上津綿上津見命、中津綿上津見命、底津綿上津見命

日本書紀の表記（岩波文庫版本より）：表津少童命、中津少童命、底津少童命

（阿曇連稲敷が「帝紀及び上古諸事」編者に任命されており、日本書紀の編纂にも参加したと思う。すると、この表記が安曇氏の統一見解と思われる。）

新撰姓氏録の表記：海神綿積豊玉彦神、海神綿積命、海神大和多羅命、和多羅豊命

（『新撰姓氏録の研究 本文篇』（佐伯有清。吉川弘文館）を底本とし群馬県立女子大学北川研究室作成の新字体版より）

祭神名表記は、新撰姓氏録が書かれた平安時代にはすでにかなり乱れていることが分かる。

#### 神社祭神の表記例（神社庁資料、神社資料による）

綿津見命（神）、綿津見大神、綿積見神、綿都美命、綿津美神、綿津美大神、綿積命

綿積神、綿津海神、上津綿津見神、表津綿津見命、底津綿津見命、中津海津見神

海津見命、海住神、海見三柱神、海積神、海少童命、海神命、海童神、海神、海大神

海祇神

渡津見命、渡海命

少童命、小童命、少童海神、少童三神、少海童命、表津少童命、底津少童命、中津少童命

和多積神、和気多津見命、土津海祇命、庭津海祇命、和田都美神、和田津美神、和田津見神、

和田住尊、広津綿津見三柱神

これらはすべて「わたつみ、わだつみ」と読んでいる。

#### 関連の神

綿津見命（豊玉彦命、大綿津見命）・・・海神であり龍王とも考えられている。

長男：宇都志日金拆命（穂高見命）

次男：布留多摩命（振魂命）

長女：豊玉姫命・・・神武天皇の祖母

次女：玉依姫命・・・神武天皇の母

#### 2) 神社の成り立ちの事情

今回調査により分かったことであるが、神社の創建の事情はさまざまであり、長い歴史の中で祭神・神社名称の変遷があり、また神社自体の興亡もある。中央の勢力争いや地域の勢力争いに巻き込まれるケースが多かったと思われる。神社は神社領地や氏子によって支えられており、そうした事情により変遷してきた。

#### ・氏神として綿津見命を祀るために創建した神社（参考としての一例）

穂高神社、川会神社、龍神社（子之神社境内社）、

海神社（神戸市）、志賀海神社、風浪宮 等々

#### ・地域における守護神として祭祀する神社

海の神として漁業や航海の守護神

龍神として水の神、治水の神

雨乞い祈願の神

この場合、既存の神社に祭神を合祀するケースが多いが、新たに設立する場合もある。

#### 3) 住吉神社との関連

住吉神と綿津見神が同居している神社が多数ある。また住吉神社でありながら綿津見神が祀られている神社もあり、逆に志賀神社（佐世保市）に住吉神が祀られている神社もある。そもそも住吉大社の宮司家であった津守氏が綿津見神を自分たちの氏神としているとのことである。住吉神と綿津見神は関連深いと思われるが、よく分からない。

4) 安曇氏族と関連の深い神社

今回の調査により安曇氏族と関連の深いと推測できる神社をまとめると以下の通りである。

所在地		神社名	祭神名	由緒等
旧国名	現在地名			
相模国	湯河原町	子之神社／龍神社	海住神	創建 700 年頃、安曇氏が祭祀した
信濃国 安曇郡 安曇郷	安曇野市	穂高神社 川会神社	穂高見命 底津綿津見命	式内社、創建不明、安曇氏が祭祀 式内社、創建 673 年、
	長野市	氷鉋斗賣神社	宇都志日金拆命	式内社、創建不明
三河国 渥美郡 渥美郷  遠江国 尾張国 伊勢国	渥美半島	なし		渥美郡渥美郷は豊橋市付近と思われ れるが、そこにはない。
	浜松市（静岡 県、遠江国）	六所神社	（綿津見神と 住吉神を合祀）	浜松市周辺に 75 社あり、安曇氏 との関連を思わせるが、詳細不明
	岡崎市	綿積神社	綿積命他	創建不明だが有史以前から続く との伝承がある
	蒲郡市	赤日子神社	（豊玉彦命他）	渥美郡誌に安曇氏祭祀とある
	名古屋市北区	綿神社	（玉依比売命他）	古文書に安曇氏が祭祀とある
	神島（三重県）	八代神社	綿津見命	合祀以前の古代から続く
美濃国 厚見郡 厚見郷	岐阜市	神明神社	綿津見神を合祀	古くには海神社あり。大正時代合 祀されて、現在に至る。詳細不明 であるが、関連あると思われる。 厚見寺跡がある。
近江国 伊香郡 安曇郷	長浜市 高島市 安曇川町	なし なし		古くに伊香郡安曇郷があった地で 安曇氏族のゆかりの地である。 しかし現在関連する神社はない
能登国	羽咋郡志賀町	奈豆美比咩神社	（豊玉比咩命）	安曇氏との関連は今のところあい まいである。今後の調査期待。
丹後国 加佐郡 凡海郷	舞鶴市	老人島神社	（別祭神）	凡海郷の氏神神社である。
		大川神社（式内社）	（別祭神）	元は冠島にあり、後世に遷座
		笑原神社（式内社）	（別祭神）	元は凡海郷にあり、後世に遷座
	宮津市	籠（この）神社（式 内社）	海神（わたつみのか み）	海神を祭祀する事情は不明
	与謝野町	宇豆貴神社（式内 社）	宇都志日金拆命	凡海郷の隣であり、安曇氏との関 連を思わせる。
		大虫神社（阿知江神 社）（式内社）	少童神	安曇氏との関連を思わせる
京丹後市	矢田神社（式内社）	（別祭神）	古くは海積神を祭祀とのこと	

補足事項

北海道・東北・北陸      なし

福島県相馬郡飯館村      綿津見神社      茗野神社から勧請、近世に綿津見神社と名称変更  
新潟県では合祀している神社ばかりであり、安曇氏族との関連は見えない

関東      栃木県塩谷郡高根沢町      安住神社      「やすずみ」と読む、祭神は筒男命 3 神

千葉県銚子市      渡海神社      祭神綿津見大神、九州方面からやってきて、この地に  
定着したとの伝承、安曇氏とは関係ない（宮司の話）

三重県      鳥羽市      海土潜女神社      祭神は「海女のお弁」。海人であるが安曇氏族との関係ない

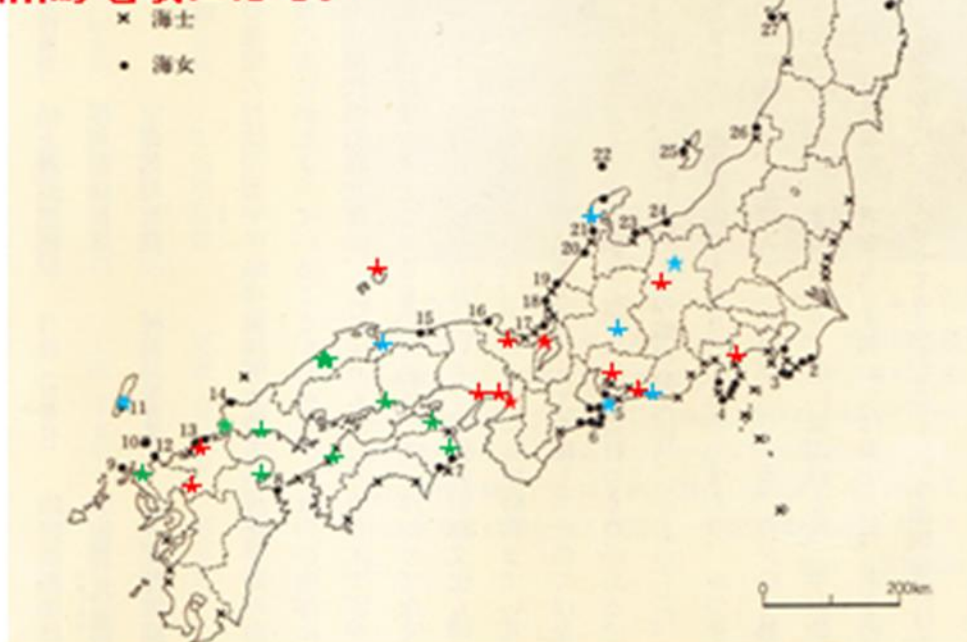
所在地	神社名	祭神名	由緒等
摂津国 難波  河内国 播磨国	大阪市	住吉大社／大海神社（式内社）	大綿津見命 『神名帳考証』では大綿津見命・玉依姫命を祭祀とある。
	大阪市	住吉大社／志賀神社	少童命 宮司の津守氏が氏神として祭祀 (摂津には阿曇寺、安曇江があった) (現在大阪市中央区には「渥美連合」がある)
	岸和田市	夜擬神社（式内社）	布留多摩命 八木造の氏神神社
	神戸市 垂水区	海（わたつみ）神社 （式内社）	綿津見三神 この地域は摂津・播磨の安曇氏族の拠点と考えられ、安曇氏族の氏神神社と思える
	明石市	林神社（式内社）	少童海神 「明石」地名発祥の元。安曇氏族との関連はあいまい。
	太子町	なし	石海里は安曇連が開拓した地
淡路国	淡路島	なし	「野嶋の海人」の記述あるが、現在痕跡はほとんどない
伯耆国 合見郡 安曇郷	米子市 上安曇、下安曇	なし	和名類聚抄に安曇郷の記載あるが、今では痕跡は薄い
隠岐国	隠岐西ノ島	海神社（式内社） （わた、うみ、かい）	海神（綿津見神と住吉神） 延喜式では海神2座（綿津見神と住吉神のことか？）を祭祀。漁法は潜水漁と異なる「カナギ」法である
石見国	島根県	なし	播磨国風土記に「石見の工人」の記載あるが、現在ではあいまい
備中国	岡山県	なし	古文書に安曇部が居住していたことが分かるが、現在あいまい
周防国 長門国	山口市 下関市	なし 龍王神社	大綿津見神 古文書等によると安曇氏が居住していたと考えられるが、現在はあいまいであり、不明
阿波国	徳島県	なし	古文書に安曇部の記載あるが、現在不明
讃岐国	香川県	なし	古文書に安曇部の記載あるが、現在不明
伊予国	愛媛県	なし	古文書に安曇部の記載あるが、現在不明
土佐国	高知県	なし	海津見神社が多数あるが、江戸時代以降の創建
筑紫国 糟屋郡 安曇郷	福岡市	志賀海神社	綿津見神 宮司は阿曇氏。安曇族の本拠地とされている
	大川市	風浪宮	少童神 宮司は阿曇氏。周辺にも風浪神社が多数あり、安曇氏との関連を思える
	柳川市	海童神社	海津見神 海童神社が柳川市には18社あり、安曇氏との関連を思わせる。
壱岐国 対馬国	壱岐市 対馬市	なし	和多津美神社あるが、詳細不明
肥前国	長崎県	なし	「阿曇連百足」記載あるが、現在は不明。
豊後国	大分県	なし	古文書に安曇部の記載あるが、現在は不明

北九州市 和布刈神社 安曇磯良 主祭神は宗像神で、磯良神は第五座の神  
長崎県 佐世保市高島町の志賀神社祭神は海童命、瀬戸越町の志賀神社祭神は底筒男命そして隣の西海市の志賀神社祭神は綿津見命である。祭神はちぐはぐである。



## 調査結果:安曇氏族ゆかりの地全国分布

- ・安曇氏族は関東以西全般に分布
- ・海人の地域との関連は見えない
- ・新潟地域にはない



元図は『海人』前川陽子、未来社、1970年より

### 安曇氏族分布

- ★信濃国
  - ★相模国
  - ★遠江国
  - ★三河国
  - ★尾張国
  - ★美濃国
  - ★遠江国
  - ★濃奥平島
  - ★近江国
  - ★丹波国
  - ★河内国
  - ★既津国
  - ★播磨国
  - ★能登国
  - ★伯耆国
  - ★播磨国
  - ★長門国
  - ★石見国
  - ★周防国
  - ★備前国
  - ★阿波国
  - ★讃岐国
  - ★伊予国
  - ★筑前国
  - ★筑後国
  - ★対馬国
  - ★肥前国
  - ★豊後国
- ★ゆかりの地  
★可能性高い  
★古文書に記載

## 6 まとめ

綿津見命を祀る神社の中で、海上交通安全・漁業繁栄・治水・雨乞いの祈願として祭祀されている神社が大半であり、安曇氏族の氏神として祭祀されている神社はわずかである。氏神神社の地域は安曇氏族に関わりのある地域と言える。

安曇氏族の痕跡を残すゆかりの地は関東以西の全域に分布しており、数多くある。瀬戸内海周辺においてはほとんど全域にわたって居住していたと思える。その点から、安曇氏族は相当に大きな勢力だったと推測される。

しかし、その後は全般に衰退してしまい、現在もはっきりした痕跡を残しているところは数少ない。衰退した事情としては、地域における勢力争いに敗れたことが考えられるが、今後の調査課題である。神社の祭神が変遷している神社が幾つもあるが、それは安曇氏族の衰亡の事情を示唆しているように思える。

安曇氏族が安曇平へ進出してきたルートとして、東海方面からのルートと北陸方面からのルートが考えられているが、北陸地域での安曇氏族の痕跡は見えない。

安曇氏族の分布地域の状況から考えると、安曇氏族が全国に進出したのは弥生時代から古墳時代の初期にかけての頃だったと推測される。応神天皇から海人の宰に任命されたのが273年であり、これから推測して古墳時代前期頃には摂津・播磨地域にはすでに定着し勢力を張っていたと考えられる。

また定着した地域において衰亡した時代は、安曇川町では継体天皇以前のことであり古墳時代の中頃だったと推測される。東海（渥美）地域では大化以前の古墳時代中ごろと推測される。舞鶴地域では祭神の入れ替えが行われたと推測すると、その時代は奈良時代以前の古墳時代後半だったと思える。他の地域では奈良時代後半頃ではないかと推測される。なおこの点についてはさらに詳しく検証すべき課題である。